産業研究（高崎経済大学地域科学研究所紀要）第59巻第1号

本邦芸術団体による社会課題解決への取組み
― 鼓童文化財団の事例 ―

佐　藤　　敦　子*

A case study on initiatives by the Japanese arts organization, KODO, to resolve social issues

SATO　Atsuko

(Received 11 September, 2023 ; Accepted 19 September, 2023)

Summary

This paper focuses on how activities conducted by arts organizations aimed at addressing social issues are implemented and how the societal impact, also known as social impact, of such activities is assessed. The paper uses the "Exadon Project" implemented by the Kodo Cultural Foundation ("Kodo"), a Japanese performing arts organization, as a case study. It conducts a semi-structured interview survey and discusses the significance and challenges associated with arts organizations' efforts to address social issues. Exadon is Kodo's original fitness program designed for health promotion and preventive care.

Several key factors are crucial in the efforts made by arts organizations to address social issues: 1) how to collaborate with third-party professionals to create meaningful programs, 2) fundraising, 3) evaluating program effectiveness, 4) developing human resources, and 5) establishing a framework for arts organizations' efforts and fostering understanding within the organization.

How to evaluate the social impact of arts projects has been an important issue. As Crossick & Kaszynska (2016) have pointed out, it is essential to move away from the conventional concept of evidence, which primarily relies on randomized controlled trials and experimental approaches when assessing the impacts of artistic interventions. It is acknowledged that the intended effects of

* 高崎経済大学経済学部国際学科・准教授

these interventions are not always quantifiable through medical indicators alone. Furthermore, the contribution of the arts to health and well-being cannot be fully comprehended through quantitative evidence alone. Therefore, there is a growing demand to combine quantitative evidence with qualitative evidence that is gathered in accordance with the characteristics and rigor of qualitative research designs. It is evident that the development of evaluation methodologies remains a significant challenge within the health-related arts sector.

1．はじめに：研究背景と研究目的

近年，芸術団体による社会課題解決に向けた取組みが増加している。従来，芸術団体の主たる活動は，創作活動としての作品を劇場やホールにおいて上演する公演活動である。そういった活動に加えて，地域・社会貢献を目的とした活動への関心が高まっている[1)]。近年では，芸術団体による様々な取組みが社会にもたらすインパクトを可視化するための「評価方法」について，活発な議論が展開されている。本邦の芸術団体は，自身の事業評価にどのように取り組んでいるのだろうか。また，芸術団体による社会課題解決を目的とした活動は，実際には社会に対してどのような効果をもたらしているのだろうか。

「インパクト評価」を仕組み化することにより，その事業効果によって行政コストの削減効果を理論的に導き，行政からの出資を仰ぐソーシャル・インパクト・ボンド（Social Impact Bonds，以下「SIB」）の仕組みに注目が集まった。我が国においても，SIB への取組みを活発化させようという機運が盛り上がった。令和 5 年現在，内閣府や経済産業省では地方公共団体や民間事業者による成果連動型民間委託契約方式（PFS：Pay For Success）や SIB による取組みを推進すべく，様々な支援策を提供している[2)]。これまでに成立した日本国内における PFS 案件事例としては，「医療・健康」「介護」「再犯防止」「まちづくり」を目的とする取組みが中心であり，実際，「医療・健康」「介護」「再犯防止」が本邦政府の重点 3 分野とされている[3)]。社会課題解決を目的とした「ソーシャル・インパクト」の合理的な可視化を理論的には行えたとしても，1 ～ 3 年程度という期間で，インパクトのある課題解決効果を示すことは容易ではない。芸術団体による社会課題解決の取組みは，「医療・健康」「まちづくり」に関わる事例が多いと推察される。それらを，SIB や PFS 対象の事業として継続的に成立させることが果たして可能なのだろうか。

本論文では，芸術団体による社会課題解決を目的とした活動がどのように行われ，そういった活動が社会に及ぼす効果，つまりソーシャル・インパクトはどのように評価されているのか，という点に着目し，芸術活動の評価に関する近年の議論を整理した上で，本邦芸術団体による社会課題解決を目的とした活動と評価への取組み事例として，公益財団法人鼓童文化財団による「エクサドン」の取組みについて議論する。

2．先行研究レビュー

芸術文化が人間に与える効果について，様々な議論がなされてきた。近年では，芸術が社会課題解決の効果を生むという実証的研究も発表され，実際，芸術団体による社会課題解決を目的とした活動が増加している。従来の演奏会や展覧会というアート（芸術）のためのアート制度の枠内ではなく，社会問題をターゲットにしたアートが仕掛けられるようになったとして，中川は「アートが社会のなかで果たす役割は急速に変化しつつある」と指摘している（中川，2009，p213）。

芸術団体による社会課題解決を目的とした活動が増加するにつれ，その効果をどのように評価すべきか，という議論が活発に展開されている。Stern and Seifert（2009）は，芸術活動がCivic Engagementに及ぼすソーシャル・インパクトの評価方法について，方法論や論点を網羅的に示した。Stern et al.（2009）は，Civic Engagementについて，アメリカ心理学会の定義を参照し，「公共の関心事を特定し，対処するために設計された個人および集団の行動」としている[4]。よって，ここでは「市民行動」と訳す。特定の芸術活動が「市民行動」に及ぼした「変化」，つまりソーシャル・インパクトについて，ケロッグ財団（2004）が提唱した「ロジックモデル」に則って，実証データを伴いつつ因果関係を説明することが有効な説明方法の1つであるとSternらは述べた（Stern et al.，2009，p38）。この考え方は広く支持され，日本においても内閣府の報告書[5]が提唱する「社会的インパクト評価」の基本形として提唱されている（垣内，小野，2021，p70）。一方で，芸術活動がもたらすインパクトの評価は，多くの場合，短期間の測定で実証することは容易ではなく，長年に渡る取組みと，それを支える持続的投資が必要であると，Sternらは指摘する（Stern et al.，2009，p56）。

イギリスの芸術・人文学研究会議（Arts＆Humanities Research Council）では2012～2016年に「文化的価値プロジェクト」として，芸術文化のもたらす価値の構成要素と評価方法に関して72件におよぶ研究助成を実施した。当該プロジェクトの総括的報告書において，文化の価値，つまり，芸術活動が個人や社会にもたらす変化をどのように捉えるべきか，包括的かつ実証的に論じられている。芸術活動が個人やコミュニティに与える変化を捉えるには，目的に合った「方法論」を選択して厳格に用いる必要があり，多角的な質的アプローチや複数基準の評価が不可欠となる。文化のもたらす変化は多面的であるため，ランダム化比較調査や準実験的手法であっても，単一の評価方法として用いることは充分ではなく，中小規模の事業では，アンケートやインタビューなどの簡素な量的・質的な調査を厳格に行うことも有益である，と指摘されている（Crossick et al. 2016＝2022，pp. 348－350）。

日本における取組みに目を向けて見ると，社会包摂など社会課題解決を目的とする芸術実践について，九州大学ソーシャルアートラボでは，様々な事例について評価方法と共に紹介しており，日本においても芸術団体の社会課題解決を目的とした活動と事業評価への取組が活発になっていることがわかる[6]。文化庁と九州大学ソーシャルアートラボは，芸術団体に向けて，社会課題解決の取組みの評価方法に関するガイドブックを共同発行している（文化庁x九州大学ソーシャルアートラボ，2019，2021）。これはCrossick et al.（2016）の報告書で指摘されている要点が網羅的かつ体系的に内包されたものとなっており，実務家にとって有用な示唆に富む手引書と

言えよう。

芸術活動の社会的インパクト評価については評価方法が確立されている状況ではなく，単一の評価方法を充当するだけでは事業効果を十分に言語化および可視化することは困難であることがわかった。芸術団体の社会課題解決への取組みは様々な分野に及んでおり，類似または異なる事業分野の事例の情報が共有されることにより，他の芸術団体に対する示唆の提供が期待される。本論文では，芸術団体による社会課題解決を目的とした取組みがどのように展開され，その社会的インパクトの評価をどのように設計されるべきなのか，という点をリサーチ・クエスチョンとする。鼓童文化財団が行っているエクサドンという社会課題解決事業を事例研究対象として，リサーチ・クエスチョンについて議論する。

3．公益財団法人鼓童文化財団による「エクサドン」の事例

本節において，鼓童文化財団による「エクサドン」事業を事例研究対象として述べる。筆者は，「エクサドン」の事業観察と，同財団の事業担当者および関係者に対する半構造化インタビューを行った[7)]。

（1）鼓童および鼓童文化財団の概要

太鼓芸能集団鼓童（以下「鼓童」）は，1971年に新潟県佐渡島に設立された「佐渡の國鬼太鼓座」を前身とする。佐渡の活性化を目指して，太鼓を核とした集団生活を行おうとした人物に若者が呼応して結成されたグループである。現在の鼓童は，和太鼓などの太鼓を中心に，様々な楽器を組み合わせ，邦楽の枠にとらわれない独自の演奏スタイルを確立し，佐渡島に活動拠点を置きつつ，日本国内外で幅広く演奏活動を展開している。1981年にベルリン芸術祭で海外デビューの後，以来50以上の国と地域で累計7000回を超える公演を行っている[8)]。国内公演と海外公演の比率は，およそ国内：海外＝3：1となっており，海外公演の累計回数は1,600回を超える。日本国内の様々なパフォーミングアーツ分野を見渡しても，継続的に海外でも公演活動を展開している団体は，鼓童の他に類を見ないであろう。近年，国内外で「太鼓」ブームと言われる状況にあるが（和泉，2008），鼓童は太鼓演奏グループの先駆者的な位置づけであり，グローバルなブランド認知を獲得していると言っても過言ではない。鼓童は，株式会社北前船が運営しており，鼓童の公演活動は営利事業にあたる。各種ワークショップの開催，鼓童研修所の運営，芸術祭の企画運営，太鼓体験施設の運営などを行うため，1997年に鼓童文化財団が設立され，2011年に公益財団法人となった。鼓童文化財団の事業は，非営利事業として行われている。

（2）社会課題解決プログラムとしての「エクサドン」の取組み

エクサドンとは「エクササイズ（運動）」＋「佐渡」＋「ドン（太鼓の音）」を合わせた造語で，2014年2月より，健康増進，介護予防を目的としたフィットネス・プログラムとして鼓童文化財団と森本芳典氏（汐彩クリニック院長）によって共同開発が行われている[9)]。

鼓童文化財団では，鼓童が培った経験と佐渡島の資源をいかし，①人づくり，②地域おこし，

③芸術文化の振興，④国際交流の 4 つを活動の柱においている[9]。2007 年より同財団が運営している「たたこう館（佐渡太鼓体験交流館）」には，様々な人々が見学に訪れ，来訪者向け有料プログラムとして「太鼓体験」プログラムを提供している。鼓童が通常，行っている演奏パフォーマンスは，和太鼓を中心とした様々な楽器を用いて，非常に高い芸術性，エンターテイメント性を備えたものである。鼓童のプロフェッショナルな演奏形態は，極めて高い身体性と音楽性が求められる複雑なアンサンブルとなっているが，ベースとなっている和太鼓は，音を出すだけであれば誰でもすぐに出来る楽器である。同財団では，たたこう館来訪者に対し，太鼓の楽しさや面白さなどの魅力に気軽に触れることが出来る太鼓体験プログラムを提供している。

エクサドンの開発の経緯としては，鼓童が拠点としている佐渡において，地域の高齢化が進むにつれて認知症対策が求められ，かつ，地域コミュニティの閉そく感などが原因となってうつ病などの精神疾患の患者も増加傾向にあり，そのような状況に対し，和太鼓を「聞く」「見る」だけではなく，「叩く」エクササイズが地域の課題解決に寄与するのではないか，と佐渡在住の精神科医である森本氏と鼓童文化財団がプログラム開発に取り組んだものである[10]。鼓童文化財団では「太鼓の力を，社会の力へ。」をスローガンに掲げ，森本氏とともにエクサドン・プログラムの開発と事業普及への取り組みを進めている。

（3）エクサドン・プログラムの実地観察

2022 年 8 月 21 日に佐渡市で開催されたエクサドン・プログラムの実地観察を行った。鼓童文化財団が，毎年 8 月に佐渡市とともに主催している「アース・セレブレーション」という音楽フェスティバル開催期間中に，有料プログラムとしてエクサドンのワークショップが実施された。プログラム参加定員は 20 名で，参加者の属性を見ると，老若男女様々な人々が参加し，うち 2 名は日本語を理解しない外国人であった（男女各 1 名）。最若年は中学 1 年生，最高齢は 79 歳，太鼓演奏の経験についても，参加者によって様々であり，全くの未経験者もいれば，地元の太鼓サークルに所属していて太鼓演奏歴 10 年以上という参加者も見受けられた。20 名の参加者を見ると，2 ～ 3 名のグループで参加しているケースが多かったが，1 名参加の人も若干名あり，参加者の多くは初対面同士であった。

写真．エクサドン・ワークショップが実施された「たたこう館」

（新潟県佐渡市）（2021 年 8 月　筆者撮影）

鼓童から 2 名が参加し，1 名はエクサドンファシリテーター認定講座の講師を務める，エクサドンに精通したファシリテーター，もう 1 名は鼓童の太鼓演奏者で，バイリンガル通訳として参加していた。プログラムの実施時間は 2 時間で，簡単なウォーミングアップから始まり，徐々に太鼓を叩いていくという流れだが，参加者同士でのロールプレイングゲームの要素も多く，参加者間で簡単な単語を発する言語コミュニケーションが生じ

る仕組みとなっている。リラックスした状態で大きな声を出したり，参加者同士で笑い合う場面も多く，全くの初対面同士だった参加者が次第に打ち解けて，途中の休憩時間やプログラム終了後に談笑し，互いに自己紹介を行うといった場面が見られた。

1名で参加していた79歳の男性の事例が興味深い。この男性は佐渡在住者で，以前，鼓童文化財団が開催した高齢者向けエクサドンに参加したことをきっかけに，太鼓を叩き始めたという。その際に，一緒にエクサドンに参加した地元の高齢者10名ほどで，太鼓サークルを結成するに至った。今回も，太鼓に触る機会ということで，プログラムに応募した。この男性は，どちらかというと口数少なく，初めのうちは積極的に他者とコミュニケーションをとる姿勢は見られなかったが，太鼓をとても達者に叩くので，プログラムが進むに連れて，他の参加者達から「太鼓マスター」と称され，一目置かれるようなポジショニングとなっていった。この男性は初めのうち寡黙にふるまっていたが，他の若い参加者から頻繁に声がけを受け，活発に受け答えを行っていた。鼓童が2014年から展開してきたエクサドン・プログラムの地元参加者に遭遇する機会となったが，太鼓が参加者のコミュニティ・ビルディングに寄与する効果を確認できた場面であった。

（4）鼓童文化財団へのインタビュー調査：概要

鼓童文化財団において，エクサドン事業に関わっている人物，および，エクサドンファシリテーター養成講座を担当している人物にインタビュー調査を行った。当該調査は，2022年9月に，Zoomを使用したオンライン面談形式で，半構造化インタビューを実施した。インタビュー実施前に，研究の目的と質問項目を文書で送付している。個人情報保護の観点より，面接者の氏名は匿名とするが，鼓童文化財団理事A氏，同財団メンバーB氏，C氏，エクサドンファシリテーターD氏の4名とオンライン・グループインタビューを1時間半程度実施した。インタビュー録画データをテキストに起こしたものと，佐渡での実施観察時の記録をもとに，当該論文次節の「調査結果」と「考察」を行っている。質問項目としては，①エクサドン事業の目指す姿，ゴール，②「目指す姿」実現に当たっての困難さ，③「エクサドン」のような社会課題解決を目的としたプログラムに取組んだことによる変化，④コロナ禍の影響，⑤芸術団体による社会課題解決を目的とする活動を行っている国内外の事例でベンチマークしているところの有無，というものである。

（5）インタビュー調査結果

エクサドンは太鼓を使って社会課題解決に取り組もうと始まったプログラムである。そもそも鼓童というグループ自体が「佐渡を元気にする」という目的で活動していることもあり，エクサドンの立ち上げにあたっては，鼓童から佐渡市の高齢福祉課に連携を働きかけ，高齢化率の高い佐渡市民が地域の中で健康に暮らしていけるプログラムを作れないか，ということから始まった。高齢化率が高まっている佐渡市の高齢者を対象とした介護予防事業として，2014年度から2017年度までの4年間，同市から事業委託を受けた。外部専門家（森本氏）のアドバイスを受け，エクサドンという独立したネーミングを有するプログラム化したことによって，それに携わる人間としては，取組みやすさが向上したとD氏は述べている。

鼓童文化財団としては，エクサドンに対して，実効性のある社会的インパクト評価の機会を早い段階から志向していた。被験者に関する厳密なデータの獲得と検証方法を検討したが，調査対象者となる高齢者への負担が懸念されることなどから，自治体からの資金助成の継続が困難となった。その後，文化庁からの資金助成を受け，千葉大学の小林正弥教授との共同研究が成立し[11]，和太鼓を用いたエクサドン・プログラムが，高齢者，一般人共にウェルビーイング（ポジティブな心理状態）の向上に寄与する可能性が示された（小林，2019，p9）。この検証実験は，実験群の対象人数が限定的であり，かつ，非ランダム実験であった。鼓童文化財団としては，インパクト評価の更なる機会創出に尽力した。佐渡市ではない地域に在る，高齢者向け医療に特化した大規模病院が，エクサドン・プログラムの導入を検討していたが，2020 年から始まったコロナ禍によって，共同事業の実施は頓挫してしまった。

コロナ禍は，鼓童文化財団のエクサドン事業の普及活動の展開や実証研究に大きくブレーキをかけることとなったが，一方で，プラス効果を及ぼした面もある。それは，オンライン配信形式での研修プログラムが成立したことである。鼓童文化財団では，2019 年から，エクサドンファシリテーター養成講座を実施している。エクサドンファシリテーターは，プログラムを進行し，促進する役割を担う。プログラム参加者の状況を理解し，適切なプログラムの進め方を判断しなければならない。鼓童文化財団が，エクサドン事業として普及していくためには，エクサドンファシリテーターの養成と訓練は重要な取組みである。コロナ禍の影響により，対面形式での養成講座を行うことが困難となったため，オンラインでのライブ講義形式に取組んだところ，認定ファシリテーターの育成活動を継続出来ることが確認された。また，物理的に新潟県佐渡市に滞在することが困難な海外居住者も，オンラインだからこそ当該講座の受講が可能となり，結果として，ファシリテーター人材のすそ野を広げることに寄与した。2023 年になって，日本におけるコロナ・ウィルスによる様々な行動制限は無くなったが，以降もエクサドンファシリテーター養成講座は，オンライン形式で実施されている（2023 年 9 月現在）。

エクサドンでは，太鼓を叩くというフィジカルエクササイズだけではなく，一緒に叩く人々との繋がりが出来ることを大事にしている，とエクサドンファシリテーター D 氏は述べた。筆者がエクサドンのワークショップを実地観察した際に，参加者同士がコミュニケーションしながらエクササイズが進行することを確認している。エクサドン参加者の属性が様々異なると予想されることから，参加者間のコミュニケーション成立の可否は，ファシリテーターの力量や経験におうところが大きい。鼓童には，和太鼓演奏の高技能者が在籍しているが，エクサドンのファシリテーターに求められるスキルは，太鼓演奏とは異なるものである。そのため，鼓童内でファシリテーターの育成は容易ではなかったという。SDGs への取組みが重要視される社会となり，芸術団体として社会課題解決に取組むことは必要なことだと考えているが，それは本来の芸術団体の中心的な活動では無いことから，メンバー間で関心や理解に温度差がある。だが，カンパニー（芸術団体）としての存続意義を世に示し，公的支援を受けていくための社会的表現として社会課題解決への取組みを作っていかなければ，カンパニーのブランドとして評価されない状況にあると認識していると A 氏は述べた。近年，芸術団体としても SDGs に取組む部門や担当者を置く必要があり，加えて，組織のトップがそういったことにも取組むことが重要である，と A 氏は指摘している。だからといって，団体内の全てのアーティストに

こういった取組みを強いることは適切では無く，自分の表現の１つとして（SDGs に関連する取組みを，自ら）選択することが望ましく，そういうことを行っている芸術家[12]と出会って学ぶ機会が大切である，とＡ氏は述べた。

海外の芸術団体による社会課題解決への取組みで注目している事例として，米国サンノゼの太鼓グループが挙げられ，地域を太鼓で元気にするという姿勢があり，そういった海外の太鼓グループは自分たちが勉強していることをすでにやっているように思われる，とＤ氏から言及された。

４．考察

鼓童文化財団による「エクサドン」の実地観察とインタビュー調査から，芸術団体が社会課題解決を目的とした取組みを行うことの意義と課題について考察する。

（1）芸術団体が社会課題解決を目的とした取組みを行うことの意義

芸術団体が存続していくためには，事業形態が営利，非営利に関わらず，その団体が提供する価値が社会にとって必要であるという「社会的存在意義」を可視化し，支持層を形成していくことが求められる。観客や顧客のみならず，地域コミュニティからの支持も必要であり，それらは興行収入に加えて，寄付金や公的助成金の獲得に影響を及ぼす。社会的存在意義を示す方法の１つのやり方は，その団体だからこそ出来るユニークでオリジナリティのある方法で，持続可能な社会形成に寄与する取組みを行うことである。近年，日本各地において，様々な芸術団体による社会課題解決への取組みが増加しているのも，こういった流れを反映したものと言えよう。芸術団体が表現の対象としている芸術活動は，観客に鑑賞してもらうだけではなく，コミュニティに対して様々な価値を提供する可能性があると，学術的にも実証されている（Crossick et al.，2016）。

和太鼓を使った「エクサドン」は鼓童らしさを活かせる取組みであり，高齢化社会の進む佐渡というコミュニティのニーズに合致するものである。鼓童文化財団は，活動の理念として「太鼓で佐渡を元気にする」というテーマを掲げて，団体が活動の拠点においている佐渡の社会課題解決への取り組みを模索していた。鼓童は，日本国内のみならず海外でも 40 年以上に渡って公演活動を継続し，国内外での認知を獲得しているが，地元のコミュニティとの共存を重視している。本論文３（3）の事例観察でも述べたように，佐渡市在住の高齢者が，エクサドンへの参加をきっかけに，初めて太鼓演奏を体験し，近隣の他の高齢者と共に自発的に太鼓サークルを結成し，折に触れて鼓童文化財団の施設を訪問するなどして太鼓を演奏する，という事象が認められた。これは，エクサドンの取組みがコミュニティ・ビルディングに寄与していることの証左であろう。

（2）芸術団体が社会課題解決を目的とした活動に取組む上での課題

① プログラムの開発：第三者のプロフェッショナルとの連携

芸術団体が社会課題解決を目的とした取組みを事業化する場合，内容にもよるが，医療効果

を目的する場合などは特に，医療の専門家などの第三者のプロフェッショナルと連携しながら，事業を共同設計・開発していく必要がある。外部の専門家と共同作業を進める際に，それぞれの立場で考え方の違いが出てくることも多く，場合によってはプロセスが継続できなくなることも起こりうる。丁寧なコミュニケーションとコーディネーションを継続的に行うことが重要である。

② プログラム継続の資金獲得

芸術団体による社会課題解決事業を行うには，活動を継続するのに見合った資金を獲得する必要がある。プログラムの開発開始から，社会課題解決の成果を生むまでには，少なくとも数年の期間を要する。プログラムが十分な効果を上げるまで事業を継続できるか，その活動を支える資金の獲得は重要である。エクサドンの事例においては，地元の自治体である佐渡市との連携を模索し，活動開始の当初，自治体から事業委託を受けた。エクサドンは，2014 年に取組みが始まって 8 年以上も継続しているが，自治体からの委託を受けたのは当初の 4 年間であった。その後，プログラムの実証的な評価を目的に，学術研究の対象として文化庁の助成金を獲得している。また，関東にある医療機関との連携を模索するなど，事業継続に向けて幅広く尽力している。

③ プログラムの実効性評価

芸術団体による社会課題解決への取組みの効果，社会的インパクトを可視化するために，実効性のある評価に取組むことは重要である。鼓童文化財団の事例では，当初から，より厳密な検証方法の可能性を検討したが，事業対象が高齢者であることから，被験者の負担軽減や人道的見地から，あえてランダム化比較試験を行わなかった。Crossick et al. は，芸術的介入の効果に関して，ランダム化比較試験や実験的アプローチを最上位に置く，既存のエビデンスの考え方から離れて見る必要があり，意図する効果が医療指標のみで測定可能とは限らない，と指摘している（2016，pp 247-248）。健康と幸福感への芸術の貢献は，量的エビデンスだけでは部分的にしか理解することが出来ないため，質的デザインの特徴や厳格さに則って集積された質的エビデンス[13]との組み合わせが需要であり，評価の方法論の開発は，健康にかかわる芸術分野の課題である，と Crossick et al. は述べている（2016，p 245-248）。

鼓童文化財団では，既に行った学術的な共同研究以外にも，アウトカム評価や，SROI 評価（Social Return on Investment）も検討したが，そういった評価の提示が求められる資金調達を行っていないので，これらの評価方法を採用していない。今後もエクサドンのプログラムを継続していく上での評価方針については，特に定性的データの収集について，更に議論を深める必要があると思われる。

④ 人材育成

社会課題解決事業を持続的に普及させていくには，人材育成が重要である。そのため，人材育成を目的とした研修プログラムの開発と継続が必要になってくる。2014 年から始まったエクサドンの取組みにおいて，プログラムのファシリテーターの育成プログラムが立ち上がった

のが 2019 年であり，コロナ禍の影響を受けつつも認定ファシリテーターの育成に取り組んでいる。

⑤ 芸術団体における取組みの位置づけ：組織内理解の醸成，取組体制の確保，アーティストの興味関心

芸術団体として，社会課題解決活動が，組織にとってどのような位置づけなのか，組織内での理解の醸成と，取組むための組織体制の整備は重要である。インタビュー調査において，エクサドンを始めたことによる団体内部での変化について質問したが，その際に得られた回答はポジティブ面，ネガティブ面，両方の反応があった。芸術団体に所属するアーティストは，芸術表現を行うことを第一の目的として職業選択しているのであり，社会課題解決活動を行うことが目的ではない。このような活動に関心を持ち，取り組むか否かは，個々の価値観や，個人の置かれている状況によって違いが生じる。SDGs への意識が求められる社会になったとはいえ，アーティストとして研鑽する時間を犠牲にして，社会課題解決活動に取組みたいと思うか否か，個人差が生じる。芸術団体として，社会課題解決に向けた一定の取組みを行うことを組織決定したならば，対象となる活動に携わる成員の取組みが組織の中で公正に認知され，然るべきサポートを得られるよう，団体の運営・経営陣は留意すべきであろう。その対応策として，芸術団体においても SDGs 対応の部署や担当者を設置することの必要性がインタビューにおいて指摘されている。

5．おわりに

本論文では，芸術団体による社会課題解決を目的とした取組みがどのように展開され，その効果のインパクト評価がどのように設計されるべきなのか，という点をリサーチ・クエスチョンとして掲げ，鼓童文化財団が行っているエクサドンという事例を研究対象として議論を行った。団体の特徴である和太鼓を活用し，団体の地元である佐渡市の高齢者を対象に，医療の専門家と共同でプログラム開発を行ってきた。このプログラムに着手してから 8 年以上の間，この取組みを継続してきた。自治体への働きかけや公的助成金の獲得があってこそ，このような取組みが成立しているのである。パフォーマンス・グループの鼓童とは別に公益財団法人として設立された鼓童文化財団においてエクサドン担当チームが組成され，長く取り組んでいる担当メンバーがいることが活動継続に寄与している。これらは，エクサドンという社会課題解決活動に鼓童文化財団として組織的コミットメントがあるからこそ，現在に至っていると言えよう。

リーマンショック以降，先進国において芸術団体を取り巻く環境は厳しさを増している。芸術団体に対する公的助成金は減少傾向が続き，芸術団体は自助努力としての寄付金獲得活動に動く必要性が高まった。一般的な商業的ビジネスでいうところの「ブランド」の重要性は芸術団体においても同じであり，「ブランド」の有無は寄付金の獲得にも影響を及ぼす。芸術団体の「ブランド」の形成は，個人向け商業ビジネスで行われているマーケティング戦略のセオリーに比較してより難易度が高い面もある。例えば，顧客による公演チケット購入の意思決定は，

商業ビジネスでいうところの「消費」としての購買行動にいたる意思決定を促せばよい。だが，チケットを買って公演に足を運ぶのみならず，その芸術団体に寄付を行ってでも応援しようという「顧客ロイヤリティ」の獲得に至るのは容易ではない。「マーケティングが上手い」「ブランド力が高い」と言われている個人向け商業ビジネスを展開している企業の多くは大企業であり，マーケティングやブランド管理に取り組む専門部署を置いて取り組んでいる場合も多い。芸術団体においても，広報活動にとどまらず，マーケティングやブランディングにどのように取組むのか，ということは団体の存続にも関わり得る重要な経営課題である。

近年，SDGs への社会的関心が高まる中，芸術文化団体が社会課題解決活動を通じて，団体の「社会的存在意義」の可視化に取組む団体が増えている。そういった活動が成果を上げると，団体に対する社会的認知向上が期待され，ひいては団体の「ブランド」強化に繋がる。一方で，芸術団体が社会課題解決に取組む活動の展開には，様々なチャレンジと課題があることが，本論文における鼓童文化財団の事例で明らかになった。今後のエクサドン・プログラムがどのように発展していくのか，今後も観察を続けたい。また，他の芸術団体が行っている社会課題解決プログラムの事例研究を積み重ね，芸術団体にとって持続可能な取組みとすることが可能なのか，要因分析に努めたい。芸術活動によって社会課題の解決が促進することは，社会にとっては望ましい状況であり，そういった取組みを行う芸術団体が社会から支援されるという正の循環が生じる状況となることを願うばかりである。

〔謝辞〕

本研究を遂行するにあたり，鼓童と鼓童文化財団の方々には実地調査およびインタビュー調査の実施にご協力いただきました。心から感謝申し上げます。

〔注〕

1）公益社団法人全国公立文化施設協会（以下『公文協』）が令和元年度に行った調査によると，日本全国の国公立文化施設の 48.9 %が地域・社会貢献活動を実施，5 %が行う予定または検討中としている（公文教，2020年，p 137）。民間施設（私立）では，地域・社会貢献活動を実施していると回答したところが 44 %，実施を予定・検討中が 9.4 %となっている（同，2020年，p 185）

2）内閣府　成果連動型民間委託契約方式（PFS：Pay For Success）ポータルサイト: https://www8.cao.go.jp/pfs/index.html
経済産業省「経済産業省における PFI/SIB の推進について」令和 5 年 4 月　https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/downloadfiles/1.PFSSIBnosuishinnitsuite.pdf
令和 5 年 8 月 28 日閲覧

3）内閣府　成果連動型事業推進室「国内における PFS 事業の取組状況について」令和 5 年 5 月 25 日 https://www8.cao.go.jp/pfs/2023chousa.pdf
令和 5 年 8 月 28 日閲覧

4）Stern et al.（2009）は Civic Engagement について American Psychological Association（2008）の定義を引用し「individual and collective actions designed to identify and address

issues of public concerns」として論じている。

5）内閣府社会的インパクト評価検討ワーキンググループ「社会的インパクト評価の推進に向けて ― 社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の基本的概念と今後の対応について ―」2016年3月　https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/social-impact-hyouka-houkoku.pdf
令和5年8月31日閲覧

6）九州大学大学院芸術工学研究院付属ソーシャルアートラボのホームページ参照：http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/
令和5年8月29日閲覧

7）「エクサドン」事業の事業視察およびワークショップ見学,，鼓童文化財団理事およびスタッフ，鼓童メンバーを対象に半構造化インタビュー調査を行った；
2017年10月　日本海大学セミナーにおける「エクサドン」説明会，
講演者　森本芳典氏（エクサドン共同開発者）（新潟県佐渡市）
2017年11月　「エクサドン」ワークショップ見学（埼玉県大宮市）
2019年 3 月　「エクサドン」講演会　講演者　小林正弥氏（千葉大学）（埼玉県さいたま市）
2019年 7 月　鼓童文化財団理事へのインタビュー（東京都）
2022年 8 月　「エクサドン」ワークショップ見学（新潟県佐渡市）
2022年 9 月　鼓童文化財団理事，職員へのインタビュー（オンライン実施）

8）出典：鼓童ホームページ　https://www.kodo.or.jp/about　令和5年8月31日閲覧

9）出典：鼓童文化財団ホームページ　https://www.exadon.com/　令和5年8月31日閲覧

10）出典：文化庁地域文化創生本部（2021）「令和2年度　障害者による文化芸術活動推進事業事例集」，和太鼓で健康増進・社会包摂を実現する「エクサドン（EXADON）」プロジェクト pp36～37
https://shogaisha-bunkageijutsu.bunka.go.jp/pdf/r2_shogaigeijutsu_jirei.pdf
令和5年8月31日閲覧

11）文化庁委託事業「平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業」

12）インタビュアーから次の二氏が言及された：①岩下徹。舞踏集団「山海塾」のダンサー。医療現場でのダンスセラピー・プログラムを行っている。②田中泯。舞踊家，俳優。

13）「観察，インタビュー，フォーカスグループなどのデータ収集の質的手法は，ナラティブ（物語）分析，テーマ分析，内容分析などの分析手法とともに，芸術を主軸とした介入をより深く理解する重要なツールである」（Crossick et al.，2016，p245）

〔参考文献〕

和泉真澄「アメリカにおける和太鼓の起源と発展 ―「日本」文化移植の三つの類型 ―」『言語文化』11（2），同志社大学言語文化学会，2008年，pp139-168

公益社団法人全国公立文化施設協会「劇場，音楽堂等の活動状況に関する調査報告書」2020年
https://www.zenkoubun.jp/publication/pdf/afca/h31/h31_chousa.pdf

小林正弥「和太鼓によるエクササイズ（エクサドン）の効果：日本発のポジティブ介入技法という可能性」『公共研究』15（1），千葉大学公共学会，2019年，pp31-52

垣内恵美子，小川由美子「地域劇場の社会的インパクトに関する考察 ― 島根県松江市しいの実シアター住民意識調査の結果から ―」『計画行政』44（4），日本計画行政学会，2021 年，pp. 70－77

中川眞「社会包摂に向き合うアートマネジメント」佐々木雅之ほか編著『創造都市と社会包摂』水曜社，2009 年，p. 213

文化庁 x 九州大学共同研究チーム編『“評価からみる社会包摂 x 文化芸術”ハンドブック』九州大学，2019 年

文化庁 x 九州大学共同研究チーム編『文化事業の評価ハンドブック　新たな価値を社会にひらく』水曜社，2021 年

茂木一司「インクルーシブアート教育システム構築のための覚え書き」『群馬大学教育実践研究』33 号，群馬大学，2016 年，pp. 35－44

山岡晶，森雄太，須田一哉，八田原慎吾，倉持武雄，橋田光代，片寄晴弘「和太鼓の効用に関する脳活動計測」社団法人情報処理学会研究報告，2006 年 file:///E:/%E7%A7%91%E7%A0%94%E8%B2%BB2018/%E5%92%8C%E5%A4%AA%E9%BC%93%E3%81%AE%E5%8A%B9%E7%94%A8.pdf

Adler, R. and Goggin, J. “What do we mean by “civic engagement”?”, *Journal of Transformative Education* 3（3）(07)，2005，236－53

Crossick, G. and Kaszynska, P. *Understanding the value of arts & culture: The AHRC Cultural Value Project*, Arts and Humanities Research Council. 2016（中村美亜（訳）『芸術文化の価値とは何か ― 個人や社会にもたらす変化とその評価 ―』水曜社，2022 年）

Stern, M. J. and Seifert, S. C. “Civic Engagement and the Arts: Issues of Conceptualization and Measurement”. Civic Engagement and the Arts. 1. *Scholary Common*, University of Pennsylvania，2009，pp. 1－70